



第36回寒地技術シンポジウムのお知らせ

第36回寒地技術シンポジウムを
札幌市(会場:札幌コンベンションセンター)で開催いたします。
寒地技術に関心を持つ多くの皆さまのお申込み、
参加をお待ちしております。
詳しくはホームページ

<http://www.decnet.or.jp/project/ctc/>をご覧ください



「寒地技術シンポジウム」ウェブサイト

■開催日:2020年11月25日(水)~27日(金)

■会 場:札幌コンベンションセンター(札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1)

■内 容:

- ★聴講(無料).....【受付締切】11月4日(水)
- ★論文(査読・報告論文共通で口頭発表を行います)
 - (1)査読論文→登録・査読用概要提出.....【受付締切】8月7日(金)
 - (2)報告論文→登録・概要提出.....【受付締切】9月4日(金)
- ★技術展示(本年はオンライン展示会となります)→お申込み...【受付締切】9月4日(金)
- ★講演論文集(CD-ROM)・概要集(冊子)→お申込み(有料).....【受付締切】11月4日(水)
- ★懇親会【開催日:11月25日(水)<3,000円(予定)>】

開催にあたっては新型コロナウイルス感染拡大対策を講じます。
状況によりオンライン開催等に変更する場合があります。予めご了承下さい。



「シーニックドライブマップ 2020年度版」 好評販売中! 定価200円(税込)

今年のテーマは、北海道ならではの絶景が待っている、「秀逸な道」。ご当地ソフトクリームを集めた「ソフトクリームde道の駅」ほか、寄り道スポット、ビューポイントと一緒に、シーニックバイウェイ北海道のスタッフがおすすめするドライブコースを紹介します!



🏠「道の駅」マップ付き! 全道の道の駅で購入できます!



北海道のよりみちドライブ情報 「Scenic Byway vol.25 夏秋号」配布中!

本号の特集テーマは、「ドライブ&Health」。夏のはじまりから秋の訪れまでの季節を楽しむ北海道の旅を、「Health」をテーマにご紹介します。北海道内の道の駅などで配布中。ぜひ手に取ってご覧ください。



編集後記

「Go To Travelキャンペーン」が開始となりましたね。みなさんは今夏の旅行の計画は立てていますか?三密を避けるという意味でも、今年は「アウトドア」が熱いですね!私の住む周辺の地域は、アウトドアショップが2店舗オープンして、休日、平日を問わずにぎわっているようです。そんな大注目のアウトドアですが、今回のマンスリーは、巻頭インタビューをはじめ、「あー!!どこかに行きたーい!」と思わず叫びたくなること間違いなし!の今の気分ドンピシャな話題満載でお届けいたします!(RW)

dec monthly vol.419

2020年8月1日発行

発行人 山口

登美男

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL (011) 738-3363 FAX (011) 738-1889 URL <http://www.decnet.or.jp/> E-mail dec_info01@decnet.or.jp



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2020.8.1 vol.419 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンスリートピック)

- 札幌近郊で楽しめるアドベンチャートラベルの可能性を探る
札幌圏における都市と自然を結ぶ
新しいアドベンチャー・ツーリズム推進事業
- 松浦武四郎の足跡とアイヌ語地名を辿る
観光ツアーコース造成の試みについて

dec Interview >>> ウェブサイトHokkaidoWilds.org代表、北星学園大学専任講師 ロバート・トムソン 氏

豊富なルート情報で世界のアウト
ドア愛好者に北海道の魅力を伝える
ウェブサイトHokkaidoWilds
(ホッカイドウ・ワイルズ <https://hokkaidowilds.org>)。
運営するロバート・トムソンさんは
ギネス記録を持つ冒険家であり、
デジタルメディアを研究する社会
心理学者です。その取り組みと北
海道のアドベンチャーツーリズム
の可能性についてうかがいました。

ニュージーランドのご出身です。日
本に関心を持つきっかけや北海道
に暮らすようになった経緯につ
いてお聞かせください。

ニュージーランド南島の都市イン
バーカーギルに生まれ育ちました。13
歳のときにクラスに日本人の男の子が
転校してきて親しくなったことが日本
や異文化に対して興味を持つきっか
けです。この友人に同行して東京を訪
れ、3週間滞在したのが14歳のとき。日
本文化に対する関心は高まり、高校で
も選択科目として日本語を学び、高校
2年生の時、福岡県筑紫野市に一年間
の交換留学をし、大学も日本語学科に
進みました。卒業後、大分県日田市の
国際交流員として日本での生活を始
めました。世界一周旅行に出かけるの
は、その数年後で、旅から戻って移り
住んだのが北海道です。

北海道を選んだのは、北大大学院に
学びたかったメディアとコミュニケー
ションに関する研究科があったこと。

また、ニュージーランド人の妻は以前、
ニセコの会社に勤務していたので、道
内に知人が多いということもありまし
た。それともう一つは「ちゃんとした
冬」を過ごしたかったから(笑)。九州
や本州の冬はあまり寒くないし、夏は
非常に暑い。日本で暮らすならば、冬
らしい冬のある北海道がいいと思っ
たのです。

北大大学院国際広報メディア・観光
学院では、フェイスブックにおけるプ
ライバシーに対する態度や関心につ
いて20カ国を調査して比較、分析し、修
士論文にまとめました。さらに文学研
究科の博士課程で社会心理学、比較
文化心理学の勉強を深め、さまざまな
国、文化を持つ人たちのインターネット
上の行動や心理について研究しまし
た。現在の専門を一口で表すのは難し
いですが、インターネット心理学とい
う分野に近いと思います。

北海道移住の前に、ユーラシア大
陸の自転車単独横断、また、スケ
ートボードによる最長の旅(12,159km/
ギネス世界記録)を含む世界一周
の冒険旅行をされました。

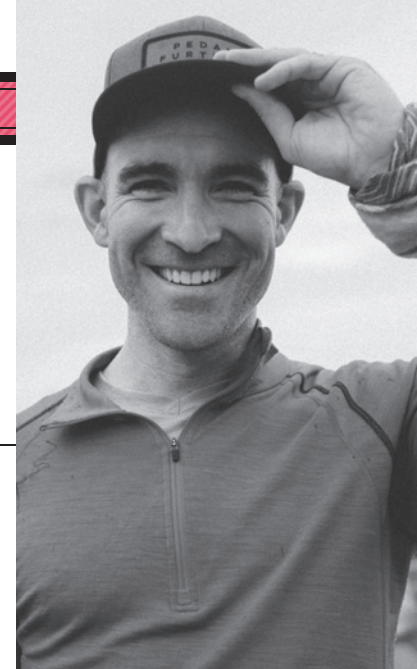
2006年、26歳のときに、当時住んで
いた大分県からイギリスまで、野宿し
ながらの自転車旅を計画しました。ま
ず、福岡から韓国の中浦まで船で渡
り、そこからインチョンまで自転車。
インチョンからフェリーで中国に入り
ましたが、自転車移動では中央アジア

独自に情報収集して旅を楽しむ
海外のアウトドア上級者に
北海道を選んでもらうには、
豊かで行き届いたコンテンツを提供する
英語のサイトが決め手になると思います。

dec Interview

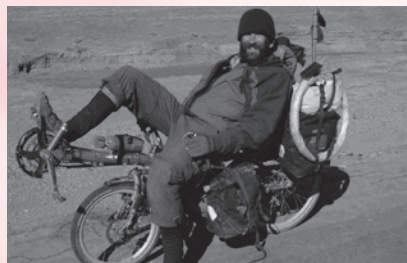
Robert THOMSON

1980年ニュージーランド生まれ。2003年カンタ
ベリー大学日本語科卒業後、大分県日田市の国
際交流員に。世界一周旅行を経て09年に北海道
に移住。11年北大大学院国際広報メディア・観光
学院修士課程修了、16年同大学院文学研究科人
間システム科学博士課程修了。17年から現職。専
門は社会心理学、デジタルメディア社会論。18年
に非営利ウェブサイトHokkaidoWildsを創設。
19年よりdecモニターツアー・アドバイザー。



で冬を迎えることになるので、列車でウルムチ(新疆ウイグル自治区)まで横断し、そこから自転車でカザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタンと走ってカスピ海を渡りヨーロッパへ。出発から9カ月でスイスに到着しました。その頃に資金が乏しくなって、スイスの野外教育センターでキャンプ・カウンセラーの仕事に1カ月ほど従事。それからイギリスに向けて再出発したのですが、自転車よりもっと挑戦的な手段で移動しようとスケートボードに切り替えたのです。

無事イギリスにゴールしましたが、まだ旅を続けたくて、今度はスケボーによる米国単独横断を計画。しかし、米国までの渡航費がないので、ヨットを米国に移送・納入する仕事を見つけ、ヨットで大西洋を横断。フロリダに到着し、そこからロサンゼルスまで5カ月かけてスケボーで米国を横断しました。さらに自転車で果てせなかった中国横断をスケボーで完遂しようとロスから上海に飛行機で飛び、カザフスタン国境まで列車で行ってからスケボーで上海に戻り、ゴール。2年半に及ぶ世界一周の旅を終わらせました。



タジキスタンのパミール高原(4,000m)を自転車で行く

まさに過酷なアドベンチャーですが、その魅力は何でしょう。近年、北海道でも推進されているアドベンチャーツーリズムに通じるところもありそうですね。

自転車、スケボーと野宿による世界一周は自分の体との戦いで、途中、病気で苦しんだこともあり、肉体的挑戦そのものでした。しかし、国境を越えるたびに未知の文化に出会うという刺激は大きく、とても面白かったです。今いる場所から50km



米国をスケートボードで横断(テキサス州にて)



中国をスケートボードで横断(カザフスタン国境付近の新疆ウイグル自治区にて)

先にどんな世界が待っているのか、どうしようもなく気になって旅を続けるという感じでしたね。

また、旅で出会った人の99.9%は親切で、人間は善良な存在だ、という実感を得ました。文化や生活習慣が違っても、怖いとか信用できないなど相手を他者として捉えがちですが、喜びや悲しみなど基本的な人間性は変わらない。言葉は通じなくても身振りや絵など工夫次第でコミュニケーションが取れます。

最近、アドベンチャーツーリズムについてさまざまな文献を読み、研究し始めているのですが、そこで感じたのは、自分がやってきた旅はアドベンチャーツーリズムではなく、アドベンチャートラベルだということです。諸説ありますが、アドベンチャートラベラーは情報や道具を自己調達し、自立的に旅の計画を立てる人、アドベンチャーツーリストはガイド付きなどあらかじめ企画されたツアーや観光商品に参加する人、という分け方ができるようです。

私のようなトラベラーには、知らないまちを地元の人に尋ねながら歩き回り、自力で問題解決するという達成感も旅の魅力です。ツーリストには、本当はトラベラーに憧れるけれど時間や経験がなくてガイド付きで旅をするというような人が多いと思います。

また、「アドベンチャー」という概念も主観的なものです。例えばシンガポールで生まれ育った人にとっては冬の北海道に来てスノーシューで歩くだけでも大きな冒険です。そういう意味では、何がアドベンチャー

ツーリズムか、ということも一樣に言えないところがありますね。

HokkaidoWildsには山スキー、登山、自転車、カヌーの計約160ルートが地図を含め詳細に紹介されています。創設の背景や目指すものを教えてください。

世界一周の旅をしている間、その体験を一日も欠かさずブログで発信していました。北海道に来てからも、各地を旅するとブログに英語で書き込んできたのですが、それに対するフォロワーのコメントに「北海道は面白そうだ」というような反応が少しずつ増えてきたのです。ブログのコンテンツが「私の旅」というより「北海道の旅」として受け止められ始めたと感じ、思い切って北海道にフォーカスしたサイトにしよう、というのがHokkaidoWildsの始まりでした。

ターゲットは自分で情報を調べて旅行を組み立てるインディペンデントなトラベラー。これは欧米の旅行者に多いと思いますが、そういう人たちが必要とする各種の情報を揃えて提供することが目標です。



中国でスケートボードで移動していると必ず子供が寄ってきた。障壁のない国際交流

彼らに北海道を選んでもらうには、北海道のアウトドア情報を英語で、豊富に、整ったかたちでネット発信することが決め手になります。

これはデジタル・マーケティングの入門的な知識ですが、私たちは高級品を購入するとき、ネット検索で詳しい商品情報を調べます。それに応えるのがコンテンツ・マーケティングで、詳細な情報を作成、提供することで購買に結びつける手法です。ネットに広告を掲載した場合、掲載期間が過ぎればその情報は消えてしまいますが、レポートなど独自作成のコンテンツをオンライン雑誌に投稿すれば、長期間掲載され、多くの人に検索されます。さらに継続的に発信すれば、発信者はエキスパートとして認知されるようになり、仕事の依頼などの可能性が広がるでしょう。北海道のアウト

ドアガイドをしているような人たちも、このコンテンツ・マーケティングの考え方で、もっと自分の持っている知識や情報を広く発信することをすすめたいですね。

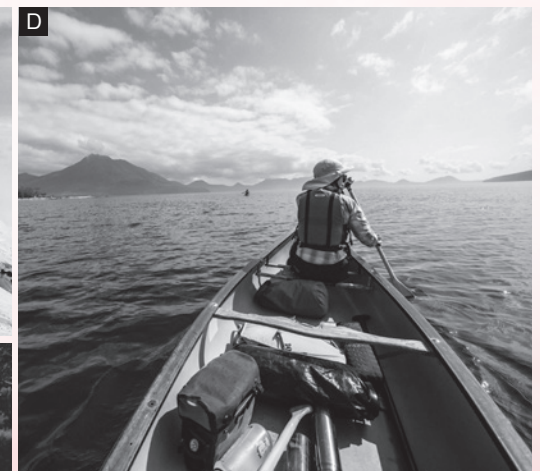
最後に、北海道におけるアドベンチャーツーリズムの可能性についてお考えをお聞かせください。

北海道のアウトドアの魅力の一つは、都市と自然との距離が近く、大自然を身近に体験できること。例えば、札幌からわずか40kmのところに自然豊かな支笏湖があり、気軽にキャンプが楽しめます。こんなことは世界的に珍しいことで、北海道におけるアドベンチャーツーリズムの可能性はとても大きいと思います。

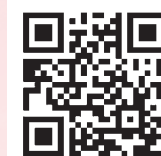
また、アドベンチャーツーリズム推進のために組織的にその可能性を

探り、最大化しようという近年の動きは非常に良いことだと思っています。ただ、少し気になるのは、そうした動きに、熱心なアウトドア愛好者やエキスパートがどれくらいかわっているだろうか、ということです。アウトドアの魅力を熟知する人たちがより多くかわり、リードすることで北海道のアドベンチャーツーリズムはより魅力的なものになっていくと思います。

アドベンチャーツーリズムに参加する人にとって、独自に冒険的な旅に挑戦する人(アドベンチャートラベラー)は憧れであり、影響力を持つオピニオン・リーダーです。そのようなアウトドア上級者を世界から北海道に呼び込むことで、一般的なアドベンチャーツーリズムも活発化するのではないかと考えています。



- A. 前富良野岳の一泊二日のバックカントリースキー(3月)
- B. 洞爺湖を一周する自転車ツーリング
泊まりは仲洞爺キャンプ場
- C. 羊蹄山の小屋泊登山(写真はBy Kaydi Pyette)
- D. 仲洞爺キャンプ場～洞爺湖中島一周への日帰りカヌー(18km, 6時間)



HokkaidoWilds
https://hokkaidowilds.org

札幌圏における都市と自然を結ぶ新しいアドベンチャー・ツーリズム推進事業

札幌近郊で楽しめるアドベンチャートラベルの可能性を探る

飛行機の窓から、北の大地を眺める。
美しい田園風景、緑の森に囲まれた都市、その中を動きまわる人と野生動物。
四季折々に様々な色を持つ北海道の魅力は、なんといっても「自然」。

自然と歴史文化、人、この地ならではのアクティビティを楽しむ旅として、札幌近郊の様々なアクティビティ体験プログラムツアーの創出に向けた取り組み「札幌圏における都市と自然を結ぶ新しいアドベンチャー・ツーリズム推進事業」をご紹介します。

dec主任研究員 富田 真未

魅力的なアクティビティ体験と歴史文化、自然風景を有する札幌圏

都市の便利さと自然の豊かさに恵まれて
いる札幌市。公共交通の充実によりスムーズな移動も可能であり、宿泊施設やレンタルサービス等も充実。この好条件にプラス、札幌から車で約1時間以内に、初心者から上級者までの、レベルに応じて楽しめる本格的なアクティビティ体験で溢れていることをご存知でしょうか。

札幌近郊には、支笏洞爺国立公園の定山溪地区や支笏湖での登山や林道を走るマウンテンバイクに適したオフロード、山スキーやスノーシューで遊ぶ冬のピクニック、川や湖を下るカヌーなど、同じフィールドでも、緑のある季節と雪のある季節で違っ

※1

た体験ができるのも魅力の一つです。まさに、AT※1に適した魅力的な地と言えます。

これらの様々なアクティビティ体験と自然風景、歴史・文化、芸術、食事などを組み合わせ、札幌滞在中に手軽に、日帰りもしくは1泊2日程度の期間で楽しめる“1Dayアドベンチャー・プログラム”を創出するため、札幌圏アドベンチャー・ツーリズム戦略会議※2を立ち上げました。現在、近郊のアウトドア施設や自転車などのレンタル施設、サイクルショップ、ガイド等と連携し、海外観光客をターゲットにした体験プログラムの開発や広報プロモーション、受け入れ環境の整備などに取り組んでいます。

アドベンチャートラベル[Adventure Travel (以下、AT)]とは

「アクティビティ(Activity)」、「自然(Nature)」、「異文化体験(Culture)」の3要件のうち、最低2つを含む旅行形態のことをいいます。例えば、「アクティビティ」はサイクリングや登山、トレッキング、カヌー、フィッシング、野生動物観察など、「自然」は美しい自然風景や魅力的な地形に触れる体験など、「異文化体験」はアイヌ文化や芸術・文化遺産、温泉、地域食などを示します。

※2 構成団体：北海道エコ・モビリティ研究会・さっぽろサイクルラボ・北海道シンガポール友好協会・(一社)国立公園支笏湖運営協議会・The Hokkaido Wilds
事務局：(一社)シーニックバイウェイ支援センター

体験プログラムの造成～モニターツアーの実施

昨年度、札幌近郊の美しい景観・自然の中で、本物の“遊び”に触れ、地域の食を味わい、地域の歴史文化に触れられる、ATを基本としたモニターツアーを実施しました(日帰りまたは1泊2日/無積雪期3回、積雪期2回の全5回)。札幌在住の外国人の他、札幌へ旅行で滞在中の外国人観光客にモニター協力を依頼し、実施後にアンケート調査を行いました。また、参加者のSNSやサイト等にて英語で情報発信してもらい、参加者やSNS閲覧者の意見等も参考に、今後の海外観光客に対するツアー商品造成のための検証を行いました。

いずれも、ツアー内容への満足度は非常に高く、認知度が向上すると参加者が一気に増加する可能性も伺え、事

前の情報発信や広報プロモーション等の重要性を強く感じました。また、アドベンチャー的なアクティビティ体験にあまり馴染みがないアジア圏の人達は、初めての体験への不安などもあり、ガイドの対応やサポート体制などへの評価もみられたことから、日本人の得意とするきめ細やかな気遣いや目配りなどが、ツアーを構成する上での重要なポイントとなり、安心して参加できる動機に繋がることがわかりました。体験メニューの時間配分、食事メニューにも工夫が必要であり、国や文化に合わせたツアー内容の検討も重要であると感じました。

札幌近郊のアドベンチャー体験プログラムツアー〈グリーンシーズン〉の例



札幌近郊のATを紹介した情報サイト「Sapporo Adventure Life」の開設と動画配信、シンガポールでの広報プロモーション

今回実施したツアー内容をまとめ、広報用プロモーションのイメージ動画を英語版で作成し、北海道への訪問回数が多いシンガポールへ広報に行きました。札幌近郊で楽しめるAT体験プログラムの各種ツアー概要を紹介したものと、観光名所である支笏湖に焦点をあてた冬のアクティビティのイメージ動画を使用し、富裕層を対象としたセミナーでプレゼンテーションを実施。有名な観光名所に加え、手軽に・身近にアクティビティ体験ができることを初めて知り、強く興味

を示す参加者も多くみられ、シンガポールの旅行会社と一緒に、今後に向けたツアー企画を検討する運びとなりました。

同時期に、体験プログラム内容の詳細を紹介する総合情報サイトも公開。今後は、ツアーでも評価の指標となったサポートについて、ガイド仲間の紹介やアクティビティレンタルの情報、札幌圏の魅力である公共交通等の情報もあわせて発信していくなど、より充実したサイトの構築を目指します。



冬のアクティビティイメージ動画。
ふかふかの雪上を走れる
ファットバイクでのサイクリングは、
欧米系の人達にも大人気



サイト
「Sapporo Adventure Life」
URL: <http://sapporo-adventure.jp/>



新たなAT体験プログラムの創出に向けて

2021年秋には、アジア圏で初となる「アドベンチャートラベル・ワールド・サミット(ATWS)」が北海道で開催されます。現在は新型コロナウイルスの影響もあり、海外からの観光客は見込めないところですが、今後は、ますます北海道への観光客の増加、アクティビティ体験が注目されることが期待できます。その時までには、既存プログラムの見直しと改善を含めた新たなプログラムの造

※令和元年度地域の魅力を活かした観光地づくり推進事業(広域連携事業)の支援により実施しています。

成、ガイドの育成、レンタル等の受け入れ環境などにも力を入れ、仲間達と一緒にエリア全体で取り組みを広げていきたいと思っています。

今回のツアーを通じて、AT体験プログラムの造成には、関わっている人自身が楽しみ面白がりながら、自分達の体験を通して“本物”を伝えることこそ、大切なことを学びました。

松浦武四郎の足跡とアイヌ語地名を辿る 観光ツアーコース造成の試みについて

dec研究員 佐賀 彩美

昨年(令和元年)、当センターでは松浦武四郎の足跡をアイヌ語地名で辿るウォーキング中心の観光コース造成を試みました。

この事業は、当センターが5年前から自主事業として、アイヌ語地名研究会(会長 藤村久和氏)に依頼して実施しているアイヌ文化及びアイヌ語地名の勉強会の成果を生かそうと企画し、北海道観光振興機構「令和元年度地域の魅力を活かした観光地づくり推進事業」に採択されたものです。

対象地域

本企画は、北海道を6回訪れた松浦武四郎の旅のうち、1858年(安政5年)、第6回目の十勝日誌に記録された行程の一部地域、具体的には旭川市神居古潭及び美瑛―上富良野間を対象としました。十勝日誌の旅は石狩に始まり、トカチルッチシ(富良野岳と前富良野岳の間の峠)を越え、十勝のオホツナイ(現在の豊頃町大津)で終わります。

アイヌ語地名ガイド育成

アイヌ語地名の理解にはアイヌ語地名が場所の特色を表していることを説明できるガイドが必要であるため、モニターツアーに先立ちガイド育成のための講習(座学と現地でのデモンストレーションツアー)を実施しました。本事業の目的は観光用のコース造成だったので、複雑な解釈論には立ち入らず、なるべくわかりやすい解説ができるような講習内容としました。例えば、神居古潭の神居岩、アイヌ語のクッネシリは、「岩崖kuをなしているne 山[sir]、魔神伝説でアイヌの神サマイルに首をはねられた魔人の胴体と伝えられるニツネカムイ覆道上部の岩、ニツネカムイネトパケは、「魔神のnitnekamuy 胴体netopake」といった具合です。近文の語源となったアイヌ語は「鳥 cikap 居る un ところ i」で、実際オジロワシが今でも営巣しています。

モニターツアー

参加者を一般公募した札幌発着のモニターツアーを実施しました。参加費は1泊2日、ガイド付きで一人1万円という破格のお値段でしたが、2日目は約20キロ歩くと募集要項にも明記していたので、参加者が集まるか心配でした。幸い、東京や道内各地から30名もの申込みがあり、関係者も含め35名が参加しました。

1日目は最初の見学場所である神居古潭に向いました。神居古潭は、かつては人気の観光地でしたが、高速道路が整備されてからは立ち寄り観光客も少なくなっています。しかし、元々景勝地であることに加え、松浦武四郎が

150年前に目にした自然が原型を留めており、その記録は十勝日誌、石狩日誌などでも紹介されています。例えば、武四郎が絵に描いた川中の大岩、レプシペ[沖にrep いつもあるusものpe→岩]やパラモイ[広いpara(poro)湾moy]は、今も神居大橋から見る事ができます。旭川市博物館も、先史時代から縄文、擦文、アイヌ時代そして現代まで時系列的な展示内容となっていて、旭川の歴史をわかりやすく学べます。アイヌの聖地、嵐山(チノミシリ)は先史時代からの遺物が発掘されており、1万年以上に亘る人間の歴史が途切れなく刻まれている道内でも数



アイヌ語地名ガイド講習



神居古潭のアイヌ語地名の解説を聞く

少ない場所です。川村カ子トアイヌ記念館では、アイヌ文様の切り紙体験に皆さん真剣に取り組んでいました。

2日目は早朝、旭川から美瑛に移動、バスで出発点の北西の丘に向かいました。日没が早まっていたのと雨模様だったので、23キロの行程を少し縮めて16キロのハイキングです。この日も、農家のご厚意で農地の中を歩かせていただきました。美瑛の丘で最も素晴らしい大雪山、十勝連山、天塩岳、夕張・芦別岳までのぐるり360度を見渡せる場所は、実は農地の中真ん中にあります。途中、武四郎がスケッチした場所に近い新栄の丘では、スケッチに挑戦したり、地元名産のジャガイモのおやつも出て楽しい時間となりました。そして、ついに予定通り日没直前に最終目的地の日の出公園に到着。記念写真の皆さんの笑顔がこのツアーを十分楽しんでいただけたことを物語っています。参加者のアンケートへの回答結果も、アイヌ語地名ガイドの評価は、「良くなかった1・普通2・良い3・とても良い4」の評価で平均が3.4、料金については、モニターツアーの

おわりに

モニターツアー参加者の高評価から、本ツアーコースは十分事業化が可能であるとの感触を得ました。7月12日に開館した民族共生象徴空間ウポポイの来館者がアイヌ文化への理解をさらに深めようと、上川に足を延ばすこともあり得ます。北海道も武四郎の出身地である三重県との間で、ウポポイのオープンを機に文化交流事業を活性化させていくことに合意しました。嬉しいことに、この事業で制作したマップが共同通信社から全国に配信されると、三重県の高校からこのコースを修学旅行に使用したいというご連絡がありました。さらに、自然、異文化、アクティビティを要素とするアドベンチャートラベル(AT)の要件も備えているので、大雪山、十勝連山と組みわせることによりAT向けのコースとしても様々なレベル設定が

モニターツアーの行程

●1日目(10月19日)

札幌→神居古潭・魔神伝説のある奇岩(魔神の頭)など見学～忠別太番屋跡～道の駅(昼食)～旭川市博物館～立岩(底なし沼跡)～近文(チカプニ)～嵐山(チノミシリ)～川村カ子トアイヌ記念館見学・体験～旭川市内泊

●2日目(10月20日)

旭川市→JR美瑛駅～北西の丘～美瑛川―置杵牛川合流点～新栄の丘(武四郎写生地)～四季彩の丘(昼食)～富良野川～民宿ステラで休息～終点 日の出公園(レリケウシナイ・武四郎野営地)→札幌

倍の定価の2万円程度ならまた参加したいと回答した方が15名、2万円以上でも参加したいと回答した方が2名と半数以上の方がモニター料金よりも高い価格でも参加したいとのこと意向でした。参加者の年齢は高めだったため、距離が長すぎるかと心配しましたが、長すぎると回答した方6名以外の24名からは丁度良いとの回答を得ました。



【6km地点】武四郎の足跡(パノラマの大地でルート説明)



ゴール地点、日の出公園での集合写真

でき有望です。本コースのうち、観光客が立ち入れない農地を含む美瑛―上富良野間については、地元ガイドを帯同する場合に限りツアーの実施を認める方向で検討されています。農業関係者も、季節の果物や野菜を有料でツアー参加者に提供できるならば、ということでツアー実現に意欲的であり、農地立入りへの協力にも前向きです。本事業は、埋もれていた本物の魅力を発掘、利用することにより、オーバーツーリズムの弊害をなくし、同時に地域により多くの利益をもたらす手法の可能性を試すテストケースともなりました。松浦武四郎の足跡は全道ほぼ隈なく及んでいるので、アイヌ語地名を地域独自の資源と組み合わせて、個性的なツアーコースが開発されることが期待されます。